

ちいきの大学

2012
冬
02

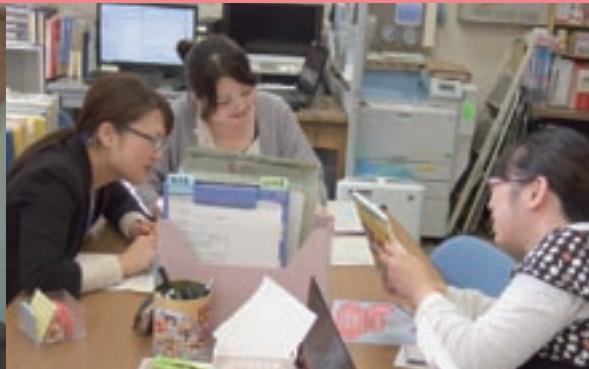
Contents

- ・井ヶ谷町内会役員との懇談会
- ・スペース Aqua 4 者連絡会
- ・リソースルーム講演会
- ・地域連携フォーラム
- ・地域教育連携推進協議会
- ・愛知県総合教育センターとの連携・協働
- ・リソースルームから
- ・カリアンナイト
- ・Q & A



愛知教育大学は教育界をはじめ広く社会と連携し、社会からの要請に応じて、教育研究の成果を還元し、社会の発展に貢献します。

<http://www.aicchi-edu.ac.jp>



ちいきに根ざす大学をめざして

地域連携センター長 都築 繁幸

大学から少し離れたところに逢妻男川と逢妻女川という二つの川があります。この二つの川は、豊田市と知上市との境界で合流し、逢妻川となっています。この逢妻川は、境川の本流に沿って流れ、河口付近で合流しています。境川は、愛知県の中央部を流れ、衣浦湾に注いでいます。境川は、かつての尾張国と三河国の境界線上を流れています。

本学は、愛知第一師範学校の男子部・女子部が愛知学芸大学名古屋分校に、愛知第二師範学校の男子部・女子部と愛知青年師範学校が愛知学芸大学岡崎分校に発展し、1966年に愛知教育大学岡崎分校と名古屋分校となりました。1970年に岡崎分校と名古屋分校が刈谷の地に統合移転し、新しい体制のもとでの「愛知教育大学」が始まりましたが、そこに至るまでに実に22年の歳月を要しました。それから40余年、刈谷の地から3万人を超える学生が卒業し、各地で活躍しています。本学が「ちいきに根ざす大学」となるように、皆様とともに確かな流れを作っていきましょう。

発行

愛知教育大学 教育創造開発機構 地域連携センター

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 tel 0566-26-2129 fax 0566-95-0035 mail chiiki@aecc.aichi-edu.ac.jp

「ちいきの大学」を目指すための具体的な取り組みが、相次いで開催されました。愛知教育大学の地元の井ヶ谷町と包括協定を締結している刈谷駅前商店街「スペース Aqua」での取り組みを紹介します。

井ヶ谷町内会役員との懇談会

9月7日午後6時半から第一福利施設で、加藤賢次市議会議長、黒川智明市議会議員、野々山利維地区長はじめ井ヶ谷町内会役員と、本学の松田正久学長、都築繁幸地域連携センター長はじめ理事・部課長合わせて41名が参加した。

懇談会では、大学から行事、最近の出来事や地域関連情報を紹介し、松田学長は大学が地域の災害避難所になっていること、地域防災や防犯、交通問題の課題について、地域とともに協議を進めることを説明した。地区役員からの正門外の防犯灯、交通問題、自然観察園の利用等についての質問に関係者が答えた。



刈谷駅前商店街「スペース Aqua」4者連絡会

4者連絡会とは、刈谷市・刈谷商工会議所・刈谷駅前商店街振興組合・愛知教育大学の4者による刈谷駅前商店街にある本学の活動拠点、市民の憩いの場『スペース Aqua』施設の運営について意見交換する会である。

10月11日に開催され、刈谷市から都市計画課・商工課より6名、刈谷商工会議所から専務理事はじめ4名、刈谷駅前商店街振興組合から理事長はじめ7名、本学から6名、合計23名が参加した。

本年度の実施イベント来場者数等の現況報告の説明後、4者それぞれの立場から多くの意見が出された。そして『スペース Aqua』発展のために今後も4者連絡会を継続することを確認した。



リソースルーム講演会

11月3日に本学で「外国人児童生徒を軸とした多文化共生社会をめざす教育支援の構築事業」講演会が開催された。主催は地域連携センターの外国人児童生徒支援リソースルームで、会場の第5会議室は満席であった。講演会のテーマは「“こころ”と“ことば”をどう考えるか」～外国人児童生徒を支える就学前からの必要な視点～であった。

講師は第Ⅰ部が東京学芸大学名誉教授飯高京子氏で、演題は「ことばと心の育ち」。第Ⅱ部は東浦町立石浜西小学校研究主任竹内淑子教諭はじめ3名の教諭で、演題は「日本語を学ぶことが先なのか」。



飯高京子氏は、講演の中で就学までに学んでおきたい目標を対人関係で7点、生活面で6点、認知・言語・学習面で4点を指摘された。人から何かしてもらったとき「ありがとう」と感謝できる、食事の際「いただきます」「ごちそうさま」を言うことができるなど“こころ”と“ことば”を自然に結びつける大切さを話された。そして、教育の目標は子どもの「自立」と「自律」の確立である。外国人児童生徒は、通常学級に在籍する日本語話者の子どもたちのように安定した教育環境に育ってこなかった例が多い。このような子どもたちへの支援は、単に日本語を習得させるだけでなく、二つの言語を話す社会の中で自己のアイデンティを確立させることとまとめられた。

竹内淑子教諭はじめ3名の教諭は、石浜西小学校における「^{まるまる}〇〇学習」での外国人児童の学びの実践例を紹介された。「^{まるまる}〇〇学習」とは2教科同時進行単元内自由進度学習の名称で、自分のペースで学習を進め、チェックポイントと4つの過程（ガイダンス・計画・追究・まとめ）を通るものである。

この学習では外国人児童の学びだけでなく、日本人児童においても多様な学びの容認や、お互いの良さを認め合うことができた。学習環境の工夫で、言語に依拠し過ぎない学習の保証が外国人児童のみならず発達障害の児童にも有効であると説明された。最後に、石浜西小学校の実践から教育行政のシステム（法・予算）を変えていく必要性を強調された。

地域連携フォーラム

テーマ：大学と地域で創造する「地域文化づくり」 —言語・コミュニケーション交流の活性化に向けて—

今回のシンポジウムでは、文化庁・大学・教育委員会の立場から、外国籍の人々が多数居住している地域における住民間の言語・コミュニケーション・文化交流の在り方等の課題について、現在の取り組みと今後の課題解決の方向性が提案された。そして、言語・コミュニケーション支援等の実際を通して、大学と地域で創造する「地域文化づくり」について討議した。

11月12日刈谷市総合文化センターで小中学校の現場教員、地域住民、教育行政担当者、大学関係者など70名を超える参加者が活発に話し合った。

5名のシンポジストと発表テーマは、本学国語教育講座の中田敏夫教授「外国人児童生徒支援にかかわる大学と地域連携の現在と将来」、本学小中英語支援室の小川知恵研究員「英語教育における支援活動—小中英語支援室の活動を通して」、知立市教育委員会の川合基弘教育長「外国人集住地区における共生教育と日本語教育」、刈谷市教育委員会の山田基学校教育課長「外国人児童生徒の指導・支援の現状と課題」、文化庁の小松弥生文化部長「多文化共生社会をつくる」であった。



シンポジストからは、次のような提言があった。

- 「内なる国際化」へ向けて、外国人児童生徒との共就学に加え、小中英語学習による教室内から国際化をめざしてほしい。
- 小中学生は、英語を使う機会が大変少ないので、ぜひ機会の増加を、そしてなぜ英語を勉強するのかを考えさせてほしい。
- 大学に期待することとして、実践の中から出てきたものを学術的に分析して現場に還元すること。学生に対する語学教育をさらに充実させ、国立大学の学生なら英語ができるようにすること。

最後に地域連携センター長の都築繁幸理事が、地域における大学の役割の重要性を述べ、全体をまとめられた。

愛知県内教育委員会地域教育連携推進協議会

12月21日にKKRホテル名古屋で開催された協議会では、現職教員研修、地域連携事業、教員養成など愛知の教育をさらに充実・発展させるための事業や方策などについて、それぞれの立場から積極的な意見が出された。

- ◆ 小中学校へ出かけ、積極的に子どもの学習支援へ入っていく学生が、教師として必要な能力や態度を体験的に学ぶ活動を大学も現場も応援していくことが大切。
- ◆ 教員採用試験に向けての大学の取り組みについて、教育への情熱、十分な児童生徒理解等、教師になったときに生きて働く力を表現できる体制づくりを望む。



愛知県総合教育センターとの連携・協働

本学教職大学院の院生9名が10月19日に愛知県総合教育センターで開催された初任者研修の様子を終日参観した。



午前中は約260名の初任者とともに講堂で「総合的な学習の時間の意義と実際」「特別活動の目標と内容」という講義を聴いた。県内で先進的な実践をされている経験豊富な先生方の講義を聴くことができた。

午後は、教科別協議会（授業の分析と診断）に、国語・算数・社会の各協議会に分かれて参加し、グループ討議・全体討議・助言者による指導助言の様子等を参観した。院生の感想は、「初任者の先生方の問題意識の高さや、教師としての使命感の強さを感じた。」「初任者になったときの課題意識がどんなものであるかが、とても具体的に理解できた。」など、県総合教育センターとの連携の成果を感じるものが多くあった。

リソースルームから

現代学芸課程日本語教育コース 准教授 上田 崇仁

「日本語がわからない」ということについて、私たちはいくつかの誤解をしているのかもしれませんが。

以前、私がアメリカに出張した時のこと、入国審査の際に審査官が英語で何かを話しかけてきました。知らない単語があって、「？」となる私に、審査官はゆっくりと大きな声で、何度もその言葉を私に話しかけてきます。

でも、わからない言葉はわからないのです。それをゆっくり話されようと、明瞭に発音されようと、大きな声であろうと、繰り返されようと。

その次に、身振り手振りで指示を伝えてくれました。ようやくここで理解できましたが、振り返ってみると、「日本語がわからない」子供たちに対して、私たちはどう接しているのでしょうか。ゆっくり話したり、大きな声で話したり、繰り返したり、それで終わっていないのでしょうか。

もう一つ。どの言葉がわかりにくいのか、勘違いしているのかもしれませんが。どの教科でも専門の言葉が難しいと感じていませんか。日本語を母国語としていた子供たちも、初めて習う言葉は同じです。先生がどのような意味なのか、詳しく、時には図や絵や実物を使って説明していただけます。じゃあ、どのような言葉が苦手なのでしょう。一般に、「教科へつなげる言葉」と言われるものが苦手なようです。日常生活でも使われて、教科ではちょっと違う意味で使われる言葉。たとえば、「2」と「3」は、どちらが大きいのですか？ という質問に「同じ！」と答える子供たちがいます。「大きい」「小さい」という言葉を数の大小が表せる語として認識していないのです。形の大小として使うことしか知らないと、「2」と「3」では、「2」のほうが大きいと答えてしまいます。子供たちの間違いの原因がどこにあるのか、経験ある先生方には蓄積があります。その蓄積を共有化する場にもリソースルームはなりたいたと考えています。



地域社会との連携 **カリアンナイト**

—刈谷市中心市街地活性化に向けての取り組み—

11月23日の夜、“カリアンナイト”、“アクアモールイルミネーション点灯式”が刈谷駅周辺を会場にして開催された。

本学美術教育講座の宇納一公教授の指導のもと美術科1年の有志が、海をテーマに製作したイルミネーションの点灯式が行われ、松田正久学長が午後5時半にスイッチを押して街が、色とりどりの豊かな海に変わった。



この“カリアンナイト”、“アクアモールイルミネーション点灯式”とは、本学と刈谷市が包括協定を締結したことに基いて、刈谷市中心市街地活性化に向けて、本学と刈谷市・刈谷商工会議所・刈谷駅前商店街振興組合が連携する取り組みの一つとして実施されているもの。

大学の知的財産が、地域と学生の協力のもと、刈谷市からの要請に応じて還元されており、刈谷市の市街地がますます発展していくエネルギーをいっぱい感じる夜であった。

地域連携についてQ&A

Q. リソースルームの教材にはどんなものがありますか？

A. 外国人児童生徒支援リソースルームは継続して国内外で開発・出版された外国人児童生徒支援用の教材、報告書、研究論文などを収集しています。また、スタッフがこれまで開発してきた教材には、国語、算数、社会といった教科のものに加え、日本語初期指導のための教材、ひらがな、カタカナ、漢字といった文字教材、言葉を増やすためのワークブック、指導者に対するヒントを提供する冊子、異文化理解教材などがあります。ホームページ(下記アドレス)からご覧ください。

すでに在庫がなくなった教材もありますが、著作権の問題がない教材からWeb上で公開していく予定にしています。どなたでも利用していただけます。開室日時等、ご確認の上、おいでください。
<http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/>